

# 三本木原開拓史要

新渡戸憲之

## 緒言

時代の流れは早い。流れ去れば再び定つて来ない。古きをたづねて新しきを知ると云う言葉があるが、今は百年の昔はあろか、五十年前の事も忘れ勝ちの時代となつた。これで新しきを知る方が無理であらう。

三本木原と云う言葉も忘れられるのであらうか。昭和三十年二月一日を以て新発足したばかりの三本木市が十和田市と改名された。なじみ親しまれた三本木の差展的解消とは云え一抹の哀愁の念を抱くのは独り私だけではあるまい。

三本木の厂史は殿様の厂史ではない。田結と武敷をほこつた支配者の厂史ではない。広葉たる

広野に水を求めて土を耕した百姓の生活史である。と喝破した川合勇太郎氏の言葉は誠にその通りであると思ふ。

三本木原開拓の厂史的勇突は三本木開拓誌三巻に盡きるのであるが、幸い私の手許には新に資料が発見され、私なりに開拓史を再び勉強する必要に迫られたので勿論考證字非文の者として皆々様の御叱正御指導にまたねはならないが、三本木原開拓史要と題名をかゝげ聊か書き綴りにい念願である。

田園都市としての新時代の御光を浴びる十和田市の前途洋々たる発展を祈念しつつ、五百年前の開拓筆蹟を今一度ふり返り、先人の新渡戸伝翁、十次郎、七郎の父祖三代に亘る苦心の跡を偲び輝か

しい地方開拓の礎を築る事も亦能きなりとせざる  
ある。

### 一、三本木原の概要

そもく三本木原と云うのは、青森県十和田市  
を中心とし上北郡の東部に位する広闊平坦なる台  
地で、区域は漠として一定しないが、凡そ、西方  
十和田市より東方約二十六軒太平洋に達し、十和  
田市外十和田町、百石町、六戸村、下田村の一市  
二町二ヶ村にまたがる草荘の地である。現任十和  
田市は三一六平方軒の面積を有し、面積六五、一  
八米の高燥なる平原の中央を占め今まで三本木市  
として親しまれていた。

三本木の地名が文献に乘っているのは『寛文五  
年巳四月』(一六六五年)の『三本木絵図』が最  
も古いと云はれ、三本木村の名称と範圍を知る唯  
一の古文獻である。これは村の肝煎を長くつとめ  
に聚七の屋号を持つ、元町の松田三千三氏に所藏  
されている。

後年、稻生川と水後才ニ上水計画の根幹をなし

に『三本木平開業之記』(新渡戸十次郎著、万延  
元年)によれば、旧三本木町を挟んで東四十里、  
南北六里を以て三本木平開業場所とし「右図中一  
円上水引渡し相成候得は數十万石に及び候へ共无  
は十萬石更込にて廻筋普請之事」とあり、開拓当  
時は勿論古来から三本木平と云はれたが後三本木  
原と改称した。現今の三本木原は其の一小部分で  
ある。

又開業之記には「氣候は四十度の未なるが故に  
寒冷の地といへとも萬国五太州の中帯の真中にし  
て春は溫夏は暖秋は冷冬は寒雪は十月末に降二月  
初に消霜は九月末に降三月末に消是四季の中初に  
叶ふと云ふへし日本南方の人はいかにも寒冷の地  
と恐るへき様なれとも長崎より札幌地迄日本地  
にしては三十度より五十度迄の真中なれば敢て恐  
るへきにもあるまじくまた当国は寇抑より午嶽ま  
て八十里余ある中に三本木は四十里前後にしが水  
は是又此国の真中也、是を以て是を覓れば萬國に  
対し日本に對し當国に對し過不足なき真中の地な  
れば氣候も寒熱中和なる故開業盛に力を盡し地力

を窺むる時は吾界才一の田畑豊饒人物繁生の地味ある所といふても可ならんか。しとあり、又前文に三本木眺望の図の説明には「右え通東西三十里南北八十里余見渡しに相成候へは日本国中にも稀なる眺望の地にして普く人目を驚かしのみならず、其広きを見て其心意も広く相成背病も忽ちに全快の心地こそしけれ。」と共に如可にも三本木原の土地、氣候條件にまで惚れ込み最大級の贅辭を惜しまない程の書き様は開拓完遂への意氣躍如として居り、父伝翁と共に三本木原開拓に心血を注いだ十次郎の面目を物語っている。

この様に當時の年平均気温は摂氏五、六度であつたのだろうか。現在の三本木地方年平均気温は摂氏九、五度に比較して余程低溫であつたのか、因みに三本木地方の氣候は次の通りである。

年平均

気温

C 九、五度

降雪期日

初雪

十一月二日

終雪

四月六日

積雪期間

終日

三月一二日

初日

一月二九日

最深積雪量

日数

七八日

八八、〇厘

初霜

一月一八日

晩霜

五月一五日

年間降雨量

一、五〇〇毫米以上

又耕地の土質分布割合は次の通りである。

区分

田畑

砂土

／

砂壤土

四〇％ 三〇％

壤土

／

粘土

三〇％ 五〇％

粘土

三〇％ 二〇％

## 二、三本木原開拓の概要

昭和十三年大規模計画は基づく三本木原開拓  
 變の初代所長、農學博士 蒲口三郎先生は常に「  
 南部藩士新渡戸伝は三本木原開拓の大恩人なり。  
 三本木原と新渡戸 伝とは、其の名二にして一、  
 萬れんとして廣るやからず」と云っている。伝翁  
 は延政二年、六十三才の老令を以て、三本木原開

拓の大志をたて、嫡子十次郎・嫡孫七郎と共に心血を注ぐこと四年九月、遂に水一滴もない荒野に奥入瀬川からの上水、福生川の人工河川による上水工事を貫通完成させ、三本木新駅を建設したのであるが、其の詳細は後記すること、して、最初に三本木原開拓の概要を記して見たい。

天明の頃、かの有名な橋南溪の『東遊記』に、三本木原の事を述べて

夫南部の地は広大無辺にして、何れの国といへども此地の広さに比すべき所なし、殊に七戸の辺に三本木台といふ野原あり、唯平々たる芝原にて、四方目にさほるものなし、此東西凡二日程、南北半月諸程ありと云、其面に人家もなく樹木も一本も見えず、実に無益の野原也とある。又

寒い／＼と三本木平コ寒い

二度と行くでない三本木平さ

と古い盆唄にさえ唄はれてゐる程広漠たる三本木原は、又平原につきものの、狐狸の巢窟でもあったのである。

この荒蕪の原野を、放置する国家的損失を慨嘆したのは、文政年間既にこの地を住復していた南部藩士新渡戸伝、平常彦であつた。後手勘定奉行僅役中、岩手、紫波、津貫、和賀の諸郡を廻り、原野の開拓適地を求め、弘化四年、和賀郡江釣子村、長沼村の開拓に成功し、次いで嘉永五年には岩手郡上田、新庄外ハケ村、志和郡太田、三本柳の二ヶ村、和賀郡藤根、高松外五ヶ村、稗貫郡宮ノ目、湯本の二ヶ村、計二十一ヶ村の開拓に成功し、愈々大開墾の自信を深めた。そして同年、兼ねて心中深く期する所のあつた三本木新田開墾の献言をし、八月には佐幕自派三本木上水の見分を行い、穴堰の穿鑿による上水可能の確信を得たが、費用の兵で藩政上実行出来なかつた。しかし相續く凶作に由る藩財政整理の爲十一年士へ要政元年八月南部藩では藩財政整理の爲寛政以後召拓の士に對しては奉給を上げ、その三分の一を十一年間給与し、その間奉行を全うし得る者だけを再び士分に取立て、又新田の開墾を願出でて成功したものにはそれを褒賞として、十年を證なくとも士分

に列せしめる方法である。の一大改革を断行し、藩士の中には新田開墾を志すもの次第に多くなり、佐翁も亦宿願である三本木開墾の大事業を出願して許され三本木新田御用寛りを仰せ付けられ着手したのであるが、斯くれ安政二年八月、翁が大十三才の時である。開墾計画は二千五百町歩、十万石の開田である。

佐翁、勇躍して黒沢尻通後藤村の吉助、理喜藏を呼び寄せ、土工頭として人夫八十八名を引ぎ連れて八月二十一日、三本木に到着、中取の江渡屋忠兵衛宅止宿、人夫もそろい総数三百五十名となつた。上水工事は奥入瀬川上流の測量を始めとし、六尺五寸を以て一畝とし、三本木の市街を十二町四方、本道路八町、裏通路巾六町とし、道路中央には堰を設けて衛生、防火の用に供し、耕地は六十町四方を一区とし、一区の間に一国道と小堰を設け、二区の間には四町と六町道を設け運搬の用に供する。と最善の利便を考慮した。

奥入瀬川上水取入口の水面と三本木原との高低差は二十二、三丈もあり、どうしても予定地より

上流から水を引く必要があり、途中の山を通し一番穴堰の工事に着手したが、穴堰の巾と高さ共に五尺とし、爆薬は勿論なし、堅岩を穿つにも鑿一つあるのみでその困難実に大なるものがあつた。併し幾多の困難をも克服して安政三年には鞍出山の千四百十二間の隧道完成し、続いて二番穴堰法臺、段の台岡工事の半ばに佐翁再び勘定奉行を命ぜられ、江戸の藩邸に去つた。嫡子十次郎へ平代へ代つて父の後継者となり、安政四年二月三本木新田御用寛りを仰せ付けられ、嗣子邦之助へ平常火、後に七郎を同道、三本木に到り父の抱負をそのまゝ受け継ぎ工事に精励した。この時十次郎三十八才、邦之助十五才であつた。この年法臺、段の台岡九百間の二番穴堰完成し、京の館深堀三丈五尺、長さ五百八十間の堰が出来上つた。

安政五年二月、ほゞ上水工事の目録もついて、十次郎は工事現場から三本木に出張し、人夫三百五十許り、其他取工数十名を便役して、移住者の家屋新築、並に假役宅所の建築に着手した。

こうして同年四月、さしもの難工事であつた穴

煙も略々終りを告げ、工事の概要を云へば、緩  
の台山の九百間の穴煙は、奥入瀬川とこれに落ち  
る中里川の水を合し、更に熊の沢川の水を加へる  
為に、鞍出山の千四百十二間の穴煙があつて、始  
めて八千五百間の煙へ流し込むのである。

同年四月には三本木村迄の平煙千九百間が完全  
に出来上り、高清水煙の難行幸、深掘りが始つた。

この間伝翁は江戸詰中で、勘定奉行として幕の  
金融に大いに精励した。そして安政六年四月には  
御役儀御免となり、夢にまで忘れる幸の出来どか  
つた三本木に戻り、再び照松に佐筆し、愈々待望  
の奥入瀬の玉の如き水、水の三本木原貫流の日を  
待つばかりとなつた。

同年四月二十四日には試みに水を穴煙に流し三  
本木迄貫流したが途中の煙に若干の故障があり、  
次の正式貫流の日を待った。

安政六年五月四日、遂に煙板は除かれた。奥入  
瀬の清流は奔馬の如く穴煙に流れ込み、滔々とし  
て三本木平に注ぎ、夢にまで画いた十和田湖の綠  
水、清水えんくとして陽に輝やぎ、草の緑に映

へ、波頭をふるわせて三本木の野面を過ぎること  
、なつた。伝翁六十七才にして竟へる終生の懇勤  
、四年九月の辛苦の果は見事に結ばれたのだ。  
そして嫡子十次郎の慰慰や如可に、孫七郎の若き  
歡喜や大。こゝに父祖三代の偉業成る。こゝに三  
本木の生命が炎火され、脈々として尽きざる将来  
への発展が約束されたのである。

次いで新田開港には伝翁、十次郎、七郎の外新  
渡戸家親族は勿論各協力者と共に努め、他面町の  
区画を東西南北十二丁四方とし、整然たる基礎を  
作り、人工陸堰たる水路には橋を架け、新駅とし  
ての三本木町の誕生を見るに至つたのである。万  
延元年八月、時の南部藩主利剛公は三本木開拓状  
況を視察し、新しい町には『稻生町』、三本木原  
の動脈たる人工水路には『稻生川』、又木の香も  
新しい橋には『稻生橋』と命名され新興の氣をふ  
き込んで下さる。各所に防風林を作ると共に、植  
林を奨励し、養蚕、農事指導、瀬戸物、鑄物、製  
革等の工業を起し、市場を設けて町の人、部老の  
人との交易を計り、馬市を設けて南部馬として天



下にその名を語る坂市の基礎を作り、稻荷神社の建立、理念寺、澄月寺等落成し、益々入馬の往來激しく新駅としての明るい希望に輝やく活況を呈するほど、着々として伝翁、十次郎、七郎の構想は実現されていった。そして二千五百町歩開墾、開田計画のうち三百町歩が開田された。

35~  
斯くして新田よりは待望の米の收穫があり、盛岡では十次郎の三男が出生し（文久二年九月一日）、新田の稻生町に因み、稻之助と名付けた。稻之助は、即ち後年国際人として大いに活躍した新渡戸稲造博士その人である。雄大は構想と若き情熱を三本木原開拓に遺憾なく發揮し、幾多の証論を胸に置き、小川原沼から陸奥湾へ亘河を掘り、下北の尻岬を廻る渡海の航路を省く計画を立て、実施するなど、三本木の開拓だけにとどまらず、遠く野辺地、下北田名部大畑方面までも将来の計画に入れている程の長男十次郎は、父伝翁の嘱望洵に大なるものがあつたが惜しくも慶應三年十二月二十四日、四十

ハ文の若さを以て盛岡に於て死去された。

伝翁の落膽は非常なものであつた。又三本木の人々の悲しみも昔後から特に親しんでい入込けに大きかつた。こうして悲しみの私情も明治維新前後の国争多難の爲、伝翁の心を慰めるものとして無く、藩命を帯びて席の温める暇もなく、七戸大参事として最後の御奉行を尽くし明治四年九月二十一日、七十九才を以てその多彩な人生の幕を閉じたのである。

伝翁生前中、墓域を太素塚と定め、三本木街外開墾新田畑を一望におさめる争の出来る丘陵の地に生前自分の好きは墓石を建て、各種樹木を植えておいた。今は静かな太素の杜に鎮まり下り、発展目覚ましい三本木町、そして三本木市と隣り、更にまた新しく十和田市として発足する争になつた新興田園都市の姿を微笑みを以て見守つてゐる争であらう。

太素塚神域には伝翁の墓石と共に嫡子、十次郎の墓石（本墓地は盛岡市久昌寺、太素塚は分骨埋葬）並びに孫、稲造の墓石（本墓地は東京都多摩区墓池、太素塚は分骨埋葬）が建てられ又稲造博士の長兄である七郎外当時協力された開拓者の霊を祀る御位牌

堂（七郎の本墓地は盛岡市久昌寺にあり、又同寺山門附近には『新渡戸七郎君牌』として顕彰碑が建立されてゐる。）があり、詣でる人々に深い感銘を与えてゐる。

佐翁の逝去後は孫・七郎（十次郎の長男）が父祖の遺志を継ぎ三本木開拓につとめると共に元会津斗南藩士の三本木初住受入れについての開拓地所割渡や住宅建築に力を盡くし、後に新渡戸家一族に依る土木会社たる現業社を起し、東北本線の基礎である当時私設鉄道の代表日本鉄道会社の盛岡より青森に至る鉄道工事を請負を先従事したが、二戸郡馬越陸直工事中に病を得て、明治二十二年四月六日四十七才盛岡で歿した。こうして七郎逝去後七郎に子なき為、弟である祖造（當時は太田家に養子に入つていて太田祖造）は再び新渡戸家に戻り、七郎の後をとり新渡戸家を嗣いだのである。

明治九年七月十二日、明治天皇東北御巡幸の砌、三本木に御小休になり、佐翁の遺業を御嘉賞され、遺族に拜謁を賜わり、祭祀料を御下賜せ

された。

明治十四年八月二十五日再び東北、北海道御巡幸の途中、車駕を三本木に駐めさせられ、旧新田会館を行在所として翁居室に御仮泊遊ばされ、遺族に対し白羽二重一疋、祭祀料を下賜され、遺業を続けつとめよと御聖旨を賜わつたのである。

聖恩洵にかけじけなく、明治十七年四月、時の上北郡長藤田重明、官を辞して共立開墾会社を創立し、同志と共に開墾、植林、上水、分水の四大事業に着手し、大正十年福生川普通水利組合の設立されるまで事業の拡張と大きな開拓の成果を収めた。又いで上北大規模開墾の議が民間より起り、遂に昭和四年五月才一、三本木原国営開墾事業開始され、昭和十三年才二、灰国営開墾の開始となり今日幾多の大規模計画に依ると共に終戦後の軍馬補充部開放に基づく開拓民の帰還、増反と緊急食糧増産計画等を経緯として、かつての荒涼たる三本木平原も三本木市を中心とする三町三ヶ村にまたがる、一万二千余町歩の新耕地開拓となり、水田二千五百町歩の当初開田計画も漸くにして産



成され、米に換算して十四万石余の増産を得るに至り、安政六年の上水より昭和二十九年の九十五周年（本年は九十七周年）にして佐翁、十次郎、七郎の抱く十万石開荒の夢を遂に実現された事は、洵に邦家の海陸實に堪えない所で、太素塚の神靈にゾクゾク今日の花こぎを吾が花こぎとして感立している事と信ずる。

そして又佐翁、十次郎、七郎の今一つの心願であつた小川原沼、野辺地、下北郡名部大畑方面の開拓は當時は調査と共に僅か着工したまゝ、で中止となつていたが、愈々今日時代の要求と国家資本

はもとより井井銀行団の大資本に依る小川原沼干拓事業、野辺地を中心とする北郡と北地方の開荒事業、農業の近代化的脚光を浴びて着々として開荒されてゐる。益々食糧増産の旗印の下、安定農業の合理化と近代産業の企画性を發揮され、経済的にも文化的にも高度の果敢農業の基礎が確立され南部の宿命たる冷害凶作問題將又氣象、地理的悪条件を克服して真に豊かになる農業建設にあつてもむくこれ等開拓事業の完遂の日が一日も早く訪れる様心から念願したい。

三・一〇・五 三本木市名を十和田市と改名の市議会議決の報を聞いて